

日本森林学会・日本木材学会合同シンポジウム「シン時代の森林・木材を考える」に参加して

NPO 法人才の木理事長竹村彰夫

NPO 法人才の木は 2009 年の第 59 回日本木材学会大会（松本）以来、学会とシンポジウムを共催してきた。残念ながら、昨年の鳥取大会はコロナ禍のため中止となったが、今年の学会大会は online で開催された。また、日本森林学会大会と相互乗り入れを行い、この公開シンポジウムでは、両学会大会の参加者は zoom webinar により、一般の方は You Tube により視聴ができ、参加者はそれぞれ 531 名、850 名に登った。

はじめに船田良日本木材学会長の挨拶があり、来賓として、千葉一裕東京農工大学学長、本郷浩二林野庁長官、高野律雄府中市長、上林山隆東京都産業労働局農林水産部長、Yoon Soo Kim IAWS 会長、からご挨拶をいただいた後、シンポジウムはスタートした。

今回私は司会として参加したが、せっかくの機会だったので、最初に才の木の PR を簡単にさせて頂いた。その後、コーディネーターの東京農工大学名誉教授の土屋俊幸氏よりシンポジウムタイトルの「シン時代の森林・木材を考える」の持つ意味、どのような議論を期待しているか、についてなどの趣旨説明があり、講演会が開始された。

最初に、東京農工大学の高田秀重氏より「プラスチック依存社会からの脱却に向けて」というタイトルで基調講演を頂いた。プラスチックの海洋への流入とマイクロプラスチックの現状、海洋生物によるプラスチックの摂食・取込、プラスチックに含まれる有害化学物質と生物・ヒトへの影響、環境と健康を守るためにプラスチック汚染対策、等についての説明があった。この中で印象的だったのは、マイクロプラスチックの話で、大きなプラスチックゴミを取り除いても、分解等により必ずマイクロプラスチックは環境中に拡散されるということであった。フリースを洗濯した時もマイクロプラスチックの PET が排水中に混ざるという。また、可塑剤、難燃剤のような添加物も環境に悪影響を与えているという。そう考えると、リサイクル、リユースの努力をしてもそこをすり抜けたプラスチックが環境中に放出されると、マイクロプラスチックは環境中に拡散し続ける訳なので、バイオマスを中心とした生分解性プラスチックに置き換えていくしか方法はなさそうだ。

次に、日本森林学会から東京農工大学の五味高志氏、森林総合研究所の石崎涼子氏から話題提供があった。五味氏はグリーンインフラとしての森林の管理とその方向性について、戦後から現在までの状況を詳しく説明された。造林・育林等の治山技術により土砂災害・風水害は減ったが、近年は主伐が進まず林齢の偏り

が生じ、また人工林の荒廃、シカの食害などにより水源涵養機能の低下が問題となっている。最近の森林を正しく計測する技術により、森林の炭素貯蔵は4,850万炭素トン/年と推定され、これは今までの計算の2倍以上の値であることがわかった。森林の将来像を描くためには単一的なシナリオでなく、様々なシナリオを想定し、機能素養することが肝要である等、様々なお話を聞くことができた。石崎氏は人や社会との関係から見た森林を研究対象としており、今回は「シン時代の私たちと森林・木材について」、環境、ICT、生活の質の観点から「新」時代の森について説明され、「森」には様々な追い風が吹いていると主張した、これは我々木材研究者も同様に感じていることである。しかし、ここでの『私たち』には各世代が含まれる、30年後には今の現役世代はいなくなり、ミレニアル世代以降が中心となり、現在とは考え方が大きく違うことになる。「真」に「森」時代を迎えようとするのであれば、これまでの視野や思考を疑ってみること、改めてゼロベースで森林生態系保全や森林資源利用のあり方を問い直していくことも必要だということであった。

続いて、日本木材学会から住友林業（株）の中嶋一郎氏、名古屋大学の福島和彦氏から話題提供があった。ちなみにお二人とも才の木の理事でもある。中嶋氏は住友林業が行っている事業を個別に説明された。持続性可能な木材を利用し、MOCCA（木造化・木質化）を推進する。それを行うための技術である、組織培養、ゲノム選抜・育種、新建材、耐火性能、建築技術等を一步一步進めることにより、W350計画が可能となる。20年後のその実現に期待したい。福島氏は「木質バイオマスから持続的・循環型社会の構築へ」のテーマで、地球温暖化の現状、それを防ぐ森林・木材の地球への貢献についてまずは説明し、その手段の一つであるバイオリファイナリーとして、セルロースナノファイバー、改質リグニン、木材のガス化、木質バイオマスから製造するプラスチックについて紹介した。また、完全サステイナブル操業を行っているブラジルの会社を例にあげ、森林資源利用を拡大し、石油に頼らなくても持続できる社会をつくるためには、一気通貫（全体最適化）で脱炭素社会の実現・基礎科学の充実、要素技術の連携が課題とした。

シンポジウムの後半は土屋氏のコーディネートでパネルディスカッションを行った。この議論の中から、都市と消費のあり方、国土利用のあり方、これからの社会のあり方、これらについて森林・木材の専門家から一般市民に対してどのような発信ができるか、あるいはすべきかが、土屋氏が講演者から引出したい今回のシンポジウムの目的であった。パネリストからは、新しい森づくり・土地利用、地域に合わせたエネルギー、自分の出したゴミの行方を考える、見える化、様々な分野での地産地消、スケールに応じた考え方、などの意見があった。

コーディネーターは以下のように纏めてシンポジウムを締めくくった。森林・木

材は日本にとって唯一豊富にある資源である。新しい社会を作るためには森林・木材は重要で、いかにうまく使うかが今後のキーとなる。それを社会として認識すべきである。

最後に丹下健日本森林学会長（才の木理事）より締め挨拶を頂いた。

今回のパネルディスカッションは専門分野が異なる研究者によるものであったが、多くの一致点が見受けられた。今後もこのような交流を続けていくことにより、森林・木材の新たな発信ができると期待される。

さて、来年の木材学会名古屋大会の公開シンポジウムは3月17日に岐阜メディアアコスモスに登壇者、関係者が集合し、そこからonlineで発信する事が決定している。才の木も共催として関わる予定である。最近の学会大会時の公開シンポジウムは一般市民の参加があまり多くないように感じられる。コロナ禍を逆に利用し、onlineのシンポジウムを行う事により、学会員だけでなく、一般の市民に対しても木材の良さをアピールするチャンスであると考えている。